大学における聴覚障害学生の意思表明支援

○益子徹[1]・有海順子[2]・甲斐更紗[3]・吉川あゆみ[4]・松﨑丈[5]・池谷航介[6]・太田琢磨[7]・木谷恵[8]・萩原彩子[9]・中島亜紀子[9]・平良悟子[9]・白澤麻弓[9]

1 日本社会事業大学大学院 2 山形大学 3 九州大学 4 関東聴障学生ｻﾎﾟｰﾄｾﾝﾀｰ 5 宮城教育大学 6 東京大学／国立民族学博物館 7 愛媛大学 8 立命館大学 9 筑波技術大学

KEY WORDS:聴覚障害学生、意思表明、環境調整と個への働きかけ

１．目的

障害者差別解消法（平成 28 年 4 月）施行に伴い、現在の障害学生支援では、聴覚障害学生からの意思表明を前提とする合理的配慮の提供が義務となっている。しかし、高校まで地域校に通っていた聴覚障害学生は自身の支援ニーズに気づいていないことや、情報保障の受け方を知らないこと、情報保障を受けることに抵抗感があることなどが報告されている(高橋, 2005 など)。しかし、個の意思表明に基づいた合理的配慮の提供のみならず、環境整備も行う必要が考えられるが、具体的な実践例が見当たらない。そこで、本研究では、大学の支援担当教職員が聴覚障害学生の状況に応じて取り組んでいる意思表明支援に向けての環境調整、個への対応について実践内容を明らかにすることで、意思表明支援を推進するための示唆を得ることを目的とする。

２．方法

対象：聴覚障害学生支援の経験の実績が比較的長い大学 6 校の支援担当教職員 13 名（1 校あたり 1～4 名）

データ収集の手続き：選択肢もしくは自由記述回答によるアンケート調査を実施した。期間は 2016 年 7 月～8 月であり、メールと郵送にて調査票を配布し、回答を求めた。調査項目は、「インタビュー協力者の属性」「修学上の支援として実施している支援内容および聴覚障害学生の意思表明を促す支援」「各場面においての、聴覚障害学生の意思表明を促すための働きかけ内容」など 31 項目とした。

倫理的配慮：本研究への協力は任意とし、得られたデータは本研究のみに使用し、個人が特定されないことを対象者に説明し、紙面による同意を得た上で調査を実施した。

分析手法：分析にあたっては、聴覚障害学生の状況、支援室の動きに該当すると考えられるものを抽出し、「環境への働きかけ」、「個への働きかけ」及び「両方への働きかけ」という軸で日本学生支援機構(2015)の組織フローチャートを参考に、時系列及び大学での場面ごと（入学試験前等）に分類した。なお、データの切片化においては、意思表明支援として行っている内容について着目し、短文で示すコーディングを行った。

３．結果

（１）回収について：全調査協力者から調査協力を得た。

（２）場面ごとにおける働きかけの実践例：Table 1 に示したとおり、支援担当教職員の働きかけの実践例について、場面ごと及び聴覚障害学生の状況ごとに「環境への働きかけ」にあたる実践例を「情報保障の環境整備」、「両方への働きかけ」の実践例を「情報保障の利用開始への支援」、「個への働きかけ」の実践例を「情報保障の主体的な活用への取り組み」とし、14 の大項目と 28 の小項目が抽出された。個及び環境への働きかけとして、入学場面から面談では対人援助技術を用いる様子や、他部署との連携が見られた。加えて、修学場面では個別支援計画の作成やモニタリングを経ていく中で、他の聴覚障害学生とのネットワークを形成し、卒業段階では社会資源についての情報提供等を行う段階的な支援が示された。

４．考察

支援担当教職員が意思表明支援のために、入学から卒業にわたり、段階的かつ個及び環境に対し働きかけているという実践例が示された。これらのことから、支援担当教職員による働きかけにおける専門性の必要についても示唆が得られた。しかしながら、これらの専門性については、必ずしも意思表明支援の専門性を確立する要素にならない可能性がある。従って、今後はこれらの意思表明支援の専門性を確立することが喫緊の課題であると考えられる。

※本研究は、平成 28 年度 PEPNet-Japan モデル事例構築事業「聴覚障害学生の意思表明支援～支援担当教職員の役割を中心に～」の一環として実施したものである。

(MASHIKO Toru, ARIUMI Junko, KAI Sarasa, YOSHIKAWA Ayumi, MATSUZAKI Jo, IKETANI Kosuke, OTA Takuma, KITANI Megumi, HAGIWARA Ayako, NAKAJIMA Akiko, TAIRA Satoko, SHIRASAWA Mayumi

Table1 各場面及び聴覚障害学生の状況に応じた支援担当教職員の働きかけに関する実践例

大学での場面			聴覚障害学生の状況				支援室の動き				
			情報保障		心理面での変化		情報保障環境の整備	利用開始への支援		主体的な活用への取り組み	
入学時	入学前		情報保障体験	OCで経験させる			場面毎の情報保障整備	OCで利用体験			
	入学試験			障害・ﾆｰｽﾞの認識				情報保障者養成	把握	支援の申請方法	把握	授業担当教員との連携
	合格後	初回面談	自身の状況説明	聴覚障害や支援経験等の説明	コミュニケーション方法	コミュニケーション方法がわからない／言えない		支援方法の情報提供	初回面談	聴取する内容	＊OC：オープンキャンパス ＊コミ：コミュニケーション ＊聴障生：聴覚障害学生 ＊1：聴覚障害学生同士の関わり
			情報保障申請への抵抗	わかったふりをする／わからないと言えない				ガイダンス		コミの方法・工夫	
								入学式		面談での情報保障	
										保護者対応	
										初回面談の留意点	
修学支援	履修・授業	定期面談	申請への抵抗	面談や5月行事等で情報保障の体験	聴覚障害の自己開示	講義が聞き取れないと悩む「実は聞こえない」と打ち明ける		具体的な支援内容決定			個別支援計画作成
			情報保障申請					認識	支援のイメージ作り	支援内容の深化	授業担当教員との連携
			準備調整	先生へ配慮依頼					イメージ作りの説明		ラポール形成
			情報保障トラブル対応	欠席連絡等					他の聴障生の活用		ｱｾｽﾒﾝﾄとﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞ
				宇幕がない等							話し方とﾀｲﾐﾝｸﾞ
			情報保障の比較体験	情報保障のない場わかりやすさ等	情報保障比較	他学生を見てその方法を試す					具体的ｲﾒｰｼﾞ促進
	評価等		発表時の情報保障	自分が発言する方法を考え始める							ロールﾓﾃﾞﾙ提示
学生生活	学生生活				同障者と交流	学生同士で本音のやり取り	聴障生同士の交流	同障の先輩等との集団形成への支援	＊1	聴障生同士／地域聴障者との関係づくりの支援	＊1	聴障先輩と交流促進
					助言	後輩へ体験語る					交流	支援学生との集まり
					調整	困り事を共有			手話	教職員の手話使用		養成講座での語り
										聴覚障害教職員	支援担当教職員による手話の使用
卒業	就職活動		困難への対峙	卒業後の危機感							社会資源の情報提供／OBの話を聞く機会の提供
	卒業			情報保障のない場							